（十三）猫の死

姉妹猫のチョコとラッテは 24 時間家から自由に出入りする。家から犬猫を出さない人はいるが、女房も亭主も、家から出られない猫は牢屋の囚人と同じで可哀そうだと思う。

姉妹は仲がよく、2 匹は 1 年ほどはいつも一緒に寝ていた。大きくなると、1 匹ずつ行動する時もあるけれど、時々相棒を探して歩き回りながら鳴く。それを聞きつけるともう 1 匹はチャンと出てきて、2 匹が鼻キッスの挨拶をして安心するふうである。なんとも微笑ましい。

猫好きの亭主がただひとつ嫌がるのは、猫のトイレである。猫用トイレは土間に用意してあるのだが、亭主が耕して種を播（ま）いたばかりの畑は猫のトイレにベストの柔らかさらしく、猫はそこにしゃがんで空（くう）を見つめ、沈思黙考して用を足し、そして念入りにあたりをひっかいて土をかける。地上に出たばかりの小さなちいさな芽は壊滅する。

それを見ていた、家族でただひとり猫嫌いのじい様が叫んだ。

「あれが、『猫ババ』か！」

大阪弁で「ババ」は婆（ばあ）様ではない。ウンチである。「俺今日ついてへんわ、犬のババ踏んでもうた」などと言う。じい様は大阪に住んだことはないが、ババの意味は知っていた。じい様に言わせると、猫がババを丁寧に隠すことから、「何かを隠して自分のものにする」という意味のネコババという言葉ができたのではないか、と言うのである。

この猫の丁寧さに比べると、犬のジョンは自分のウンチに土をかける仕草はするが、きちんとウンチにかかった試しがない。それどころか、犬の代わりに草や土でウンチを覆っている最中の飼い主に、盛大に土くれをとばす。そして気が済むと、飼い主の動作にかまわず走り出す。

頭が悪い。

もうひとつ家族が納得したのが、「猫またぎ」という言葉だった。まずい魚の意

味である。

猫は、餌が気に入らないと、前足を伸ばして餌皿の向こうの床を何度も掻（か）くことがある。餌を跨（また）いでみせるのである。

あるいは、フン、フンとドライフードの臭いを嗅いでおいて、食べずに姿勢を正して座り、やや甲（かん）高く、ニャン、と一声鳴く。「こんなまずいもの、アタクシいただききませんの」という意思を人間に伝えているのだ。そして缶入りの餌だと、すぐにしゃがみこんで食べる。

チョコに比べてラッテのほうが食べ物の選り好みがきつく、結果、より痩せている。このグルメ根性には感心する。人間ならいくらまずくても、腹が減れば食べるというものではないか!?

犬と比べて格段にグルメの猫は、犬の餌を食わない。犬は猫の餌を喜んで食うが、山羊の餌は残す。山羊は犬の餌を喜んで食う。

結論は、猫、人間、犬、山羊の順でグルメ、ということになる。

猫より食にこだわる人間を、夫婦は知らない。

猫の爪とぎは、同居する人間の悩みの種である。市販の爪とぎよりも壁紙のほうが、爪のひっかかり方が理想的らしく、特に廊下の角は無残にはがされる。猫好きの一家は、家中の壁に腰板を貼ることにした。ペットを飼うのにも、意外なところで金がかかる。

ペットに伴うもうひとつの問題はダニや蚤（ノミ）である。

この家族が昔アメリカに住んでいたころ、ジジと言う仔猫を飼い始めた。手足の先だけが白く、残りは全部ツヤのいい銀色。足も長く、スタイルのいいきれいな猫だった。が、家族と一緒に日本に来たジジは、当時多かった野良犬に間もなく殺されてしまった。生まれ育ったアメリカに野良犬はいなかったから、木に登るとか、狭いところに逃げこむとかいう対処法をジジは知らなかったのだろう。

可哀そうに。

ずっとアメリカにいたら、死なないですんだかもしれないのに。

連れてきたわたしたちが悪かったかしらん。

その悲しみと後悔の念がまだ癒えないうちに、女房の足に大量の虫刺されの痕（あと）ができた。それも足首周辺だけである。もちろんカユイ。首をひねった女房が皮膚科に行くと、「ペット飼ってます？」と聞かれた。

「2 週間前までは猫がいましたけど。今はいません」

「じゃ、それですね。猫ノミです。ノミはふだん床にいて、人間が来るとジャンプしてくっつきます。そのジャンプできる高さが 20 センチまでくらいなんで、人間が刺されるのも足首周辺に限定されるんですよ」

なるほど。

しかし、猫が死んで 2 週間もたっているのに、ノミだけが生き残っているの？

半信半疑の女房が家に帰って居間のじゅうたんを点検していると、ソファカバーのふくらはぎがあたる部分に、信じられないほど多くのノミがくっついていた。女房は絶叫し、火になって家中丹念に掃除機をかけて回り、ソファカバーも洗濯した。殺虫剤のバルサンも焚（た）いた。

しかし。

その晩亭主が寝ようとしたとたん、目の前で小さなノミが、次々にピョンと跳ねた。

亭主は絶叫し、ノミを 1 匹 1 匹捕まえては、かたっぱしから爪でつぶした。

さらには敷布団（しきぶとん）を剥（は）ぎ、目を皿にして畳の上を探し回る。

寝るどころの騒ぎではない。

あわてて翌日は畳に差しこむタイプの殺虫剤を買ってきたが、亭主が入念に観察を重ねた結果によると、どうもノミはふだん畳の縁と縁との間に潜（ひそ）んでいて、人が来たと察すると上に出てくるようだった。蚊やノミには二酸化炭素センサーがついていて、人間の呼気を感知して近寄るという。敵ながらアッパレ。もちろん振動も感知しているだろう。しかし、これでは駆除しきれない。

亭主は毎晩寝る前に 30 分、ノミ退治に追われるハメになった。

とんだ災難である。

しばらくは亭主も女房も、黒い小さなものはホクロや胡麻（ごま）でさえ、全部

ノミに見えた。

この経験から、女房は新しく格言をつくった。

「虎は死して皮を残し、猫は死してノミを残す」。

こういったトラブルは、ペットを飼う以上仕方がない。

が、それ以上に、なんといっても猫自体の最大の悪癖は、道路で疾走する車の直前を横切ることだろう。運転手はギョッとするし、それを目撃する飼い主も猫の後について飛び出そうになる。何度運転手に頭を下げたかわからない。

そして——

春の朝早く、じい様が新聞をとりに門へ出ると、チョコが門の中で手足を伸ばし、冷たく横たわっていた。

たぶん新聞配達か、朝早く仕事に行く人の車の前を横切り、間に合わずはねられ、なんとか家まで帰ってきて、息絶えたのだ。

半年後、ラッテも同じ運命をたどった。

どうしてこの家の猫は代々みな短命なのだろう？

チョコとラッテの前は、「エウローパ・コムネ（ヨーロッパ普通種）」とイタリアで分類された虎ジマのトラが5年、その前は英語でジンジャーキャット（生姜［しょうが］色の猫）とも呼ばれる薄茶のタマが1年、その前の銀色のジジに至ってはわずか半年、さらにその前の薄茶のミー、マー、ムーも2年足らずで、脱走したり、犬に襲われたり病気にかかったりして亡くなっている。

家中で可愛がっているつもりなのに。

飼い猫が死ぬといつも一晩居間において通夜をし、あくる日家族で庭の片隅に埋めて拝む。

とてもとても悲しい。

命ははかない。

猫がいなくなると、じい様以外はみんなさみしい。

次の猫が飼いたい。

「いや、ちょっと待って」と女房は言った。

すぐ次の猫を飼ったら、前の猫が忘れられるみたいで可哀そうだよ。少し喪に服してやろうよ。

それに、今度の春はお雛様が飾りたいし。

というのも、猫は家の中の小さなもので遊ぶのが大好きで、酒好きのじい様がこっそりコンビニで買ってくる酒がポケットウイスキーだとバレたのは、じい様のベッドの下からラッテが「手」ではじき出して遊んでいた瓶のフタのせいだった。

そんなゴミならまだしも、女房が気に入って実家から持ってきた、風情のある和紙製の雛人形を居間に飾っていたら、猫はその頭をひっこ抜いて弄（もてあそ）び、髪は散々なザンバラ、顔は爪と歯の痕だらけにしてしまった。友人がくれたお手製の日本人形の頭も、同様の無残な姿になった。

となると、ましてや長女が産まれた際に実家から貰った立派な雛人形は、断じて猫の被害にあわせるわけにはいかない。七段飾りの豪華版で、三人官女、五人囃子から随身（ずいしん）、衛士（えじ）、蒔絵（まきえ）道具までそろっているのだ。以前は客用の和室に七段全部を飾っていたのだが、じい様が来て以来、和室はじい様の寝室兼居室となっている。七段飾りのお雛様は箱から出されなくなった。

だからせめて、お内裏様とお雛様だけでもピアノの上に飾りたいのだが、「猫から守るには特注のガラスケースが必要だろう」と亭主は主張する。そうね、と言いながら女房は面倒がってガラスケースの注文には行かず、数年がたっていた。

「猫がいないのはさみしいけど、たまにはお雛様を箱から出してやりたいねぇ。それなら猫のいない今年しかないよ。次の猫を飼うのは 4 月まで待って」

亭主も子どもも女房の主張をのんだ。